

2021/06/26 公開



ごうちゃんねる (GO-CHANNEL)

■ユダヤ入門シリーズ■

#29 「イスラエル建国の父テオドル・ヘルツル」前編

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。今日はユダヤ入門シリーズ第29弾！パチパチパチ！  
いよいよ イスラエル国家再建運動のスタート、そして、“イスラエル国家再建運動スタートの父”  
とされているテオドル・ヘルツルについてご紹介します。

ユダヤ人の正月/新年は大体9月から10月。秋なんですね。1年の長さが年によって違うので若干ずれるのですが、新年をヘブライ語でロシュ・ハシャナーと言います。  
ユダヤ人は世界中に散らされていた間、ロシュ・ハシャナーの時はショファールという角笛を吹くんです。  
この角笛をプーッと吹く時に唱える祈りが「我々を先祖の地、あの約束の地に連れ帰ってください」という国家再建の祈りの言葉です。これを約2000年間続けて来たんですね。

もう一つ。ユダヤ人の重大なお祭りの1つに過越（すぎこし）の祭りがあります。  
イエス・キリストが最後の晩餐をされますが、あれは過越の祭りの上になされているんですね。  
過越の祭りの最後にお別れの決まり文句があって「来年こそエルサレムで。」  
今年はアメリカで祝った。今年はフランスで祝った。「しかし来年こそは、ユダヤ人の国イスラエルが再建されていて、首都エルサレムで過越の祭りを祝うことができますように。」  
この祈りが定型句というか、決まり文句でそれを閉めるというのが決まってるんですね。

ユダヤ人は1年に2度は「自分たちの国が再建されますように」という祈りをして来たのですが、但し、これは1000年・2000年続けてたら形骸化します。  
確かにユダヤ人の国があったら それに越したことはないんだけど、「それは、いつか誰かがしてくれたらいいよなあ」ということで、具体的なアクションプランがあるわけではないんですね。  
「そうならいいなあ」という希望的観測のようなものにしかならなかったんです。



Wikipedia より

しかし、“ユダヤ人が自分の国を持つ。イスラエルを再建する”という国家再建ビジョンを一般ユダヤ人大衆の心に火をつけた人物が、遂に19世紀に登場するんですね。  
それがテオドル・ヘルツル（1860-1904）。  
旧約聖書時代の預言者を彷彿させるような風貌をしていますね。風貌だけじゃない。  
彼にはリーダーとして持つべき素質がほとんど揃っていた、と言われるようなすごい人物でした。

ヘルツルは1860年にハンガリーのブダペストで生まれました。ハンガリーでドイツ語の教育を受けたのでドイツ語ペラペラ。ドイツの文献をいくらでも読むことができました。  
最初 法律家を目指すのですが、途中でジャーナリズムに転向して、ウィーンの有名新聞ノイエ・フライエ・プレッセの記者になります。そして、元々好きだった文芸欄の編集に携わるんです。  
新聞には文芸欄がありますね。特に19世紀末のウィーンですよ。世紀末ウィーンですよ。文化のこともすごく充実していたわけです。自分でも劇作の脚本書くし、小説書くし、色んな劇作の批評もするんです。

その頃の彼は、生い立ちを見てもそうですが、ユダヤの宗教的伝統に浸ることがほとんどない世俗のユダヤ人です。彼の考えは、「世俗にまみれて、他のヨーロッパ人と同じようにしてたらいいいじゃないの。」  
「私たちユダヤ人もヨーロッパ人の一員です。隣人たちとはちょっと宗教が違うだけで、おんなじヨーロッパ人ですよ。同じように生活してたら、そのうち受け入れられるし同化するし。」  
また、「ヨーロッパのユダヤ人問題を解決するには、ユダヤ人がキリスト教に集団改宗したらいいんだ」みたいなことを、言ったり書いたりしたこともあったんです。

彼が書いた作品は何と言うか政治色が無い。昼メロみたいなやつ。内容的には軽い。惚れた腫れたの内容ですよ。ユダヤ性に対してほとんどこだわりがないユダヤ人。それがヘルツルでした。

その彼の考えが完全に変わる瞬間がやって来た。それが、前回お話ししたドレフュス事件だったのです。1894年 彼は34歳で、パリの特派員としてフランスにいました。その時、フランス軍の高級将校でユダヤ系のドレフュスにスパイ容疑が掛けられ、十分な証拠が挙がってないにもかかわらず、侮辱され、追放され、悪魔島に島流しになったのですが、後で分かったんです。冤罪だったんですね。

ところが、その事件があった時に市中から上がった声は「ドレフュス！この裏切り者め！」ではなく「ユダヤ人は去れ！」「ユダヤ人は信用できない！」  
ドレフュス個人がした事に対してユダヤ人全体への嫌悪感、いわゆる反ユダヤ主義がウワーツと溢れた。フランス革命のあのフランスでさえ、そんなことが起こった。実はこの時代、西ヨーロッパでも東ヨーロッパでもロシアでも、反ユダヤ主義/ユダヤ人への偏見や嫌悪感が再燃していたんです。

それを見た時、「ユダヤ人が受け入れられるというのはそんな簡単な問題じゃない。ユダヤ人の問題を解決するためには、やはり先祖の国に帰って自分の国を持つ以外ない」と考え、3週間不眠不休で、歩いている時も、ご飯食べてる時も、夜寝てても夢の中にまで出て来るくらいずっと構想を考えます。

そうして、“どうやったらユダヤ人はパレスチナの土地に行って、もう1度国を持つことができるか”という行動計画の原稿を書きました。“いつか誰かがしてくれたいいなあ”という抽象的な淡～い希望を書いたのではなく、“こうやったら国が出来るんだ”という行動計画。その名もズバリ『ユダヤ人国家』。

彼はそれを書き上げて、自分のことを分かってくれそうな、同じ志を持ってくれそうな、同じユダヤ人の友人に読み聞かせ、「キミ、どう思う？」この友人が言ったひと言は「おまえ、気い狂ったんか？」  
「気い狂ってなんかないよ。これは夢物語じゃないんだ。具体的なアクションなんだ！」  
1つ1つ数字を挙げて計算し、具体的に実現性があるものだというをずっと話して、「これが理解できないなら、間違ってるのはキミのほうだぞ！」  
同じユダヤ人で分かってくれそうな友人に「1800年振りにもう1度国を造る」と話した時、具体的な行動計画が書いてあったとしても変人扱いされるということを経験したのですが、彼は全くひるまない。

次に彼がしたことは、当時19世紀のヨーロッパで、泣く子も黙るドイツ帝国の鉄血宰相ビスマルクに手紙を書いたんです。

「ユダヤ人問題解決のためには、約束の地にユダヤ人の国を持つしかないと思って、私はこういうプランを持っているんですけど、このことがユダヤ人問題の解決になるとお思いでしょうか。或いは、そんなことは現実離れしていて、話にもならないということでしょうか。多くの政治経験を積まれた閣下のご意見を伺いたいです。どうぞ忌憚のない意見を教えてください。返信お待ちしております。」  
熱烈な手紙を書きました。…なしのついでです。そらそうでしょ。相手ビスマルクですよ。

ヘルツルは一介の新聞記者。無名の人です。そんな多忙な有名な人にダイレクトメールで手紙書いて、返事来るわけがないんです。が、彼はひるみません。

次に彼がしたことは、プラン実行のために必要なスポンサーを募ること。  
そこで、ユダヤ世界の大家に協力を仰ごうと、ロスチャイルド家に手紙を書きます。  
特に、パリ・ロスチャイルド家の第2代当主アルフォンソ・ロスチャイルドに向かって。

アルフォンソ・ロスチャイルドはパリ・ロスチャイルド銀行の頭取であり、同時にフランス中央銀行の理事でもあり、何よりも慈善事業家として有名でした。フランスの200か所以上の町や村や都市に博物館を寄贈したり、私財で学校・役所・美術館を造ったり、道路を敷いたり、橋を架けたり。フランスの人たちの文化的生活向上のために、彼は自腹を切ってお金を惜しみなく投入する慈善事業家だったんです。

「フランス人にそのようになさるのなら、同胞ユダヤ人が何も無いパレスチナに移住して行った時、彼らの生活のために寄付してもらえないでしょうか。こんな素晴らしいプランがあるんです。ユダヤ人が遂に自分の国を持つためのその行動計画です。」

手紙を送るんですね。…なしのつづてです。しかし、彼は一向にへこまなかった。  
当時の日記にこう書いてあります。「私が今していることは、この上もなく意味があり価値あることだから、反応が無くてもそんなに落ち込むことはない。」いやあ、見習いたいですねえ。

そして彼は、3週間で書き上げた原稿段階の構想を1896年、あのドレフュス事件の2年後、遂に本にして出版し、世に送り出しました。この本が世に出た時、もう無視されませんでした。大反響です。但し、その大反響の大部分は反対意見なんです。ぼろっかすに、くそみそに、「何をたわけたこと言ってるんや、この男は！」特に、彼が一番味方に付けたかった同胞ユダヤ人の成功者たちから批判され、けなされました。

なぜ西ヨーロッパのユダヤ人成功者・大金持ち・社会的地位があり色んな影響力を持っている人に限って、このユダヤ人問題に反対したのか？ 彼らはヨーロッパ人の一員として成功者になっているからです。努力して忠誠心認められて成功者の地位に就いたのに、「ユダヤ人が自分たちの国を造るために、ここで何か運動を起こそうとしているぞ。その運動に協力しているのはあいつだ！」  
そのような噂が立てば、国家に対する、或いは今自分が所属している社会に対する忠誠心を疑われてしまうじゃありませんか。今の自分の生活を脅かすものになってしまうじゃありませんか。  
だから「そんなユダヤ人国家造るとかね、やめろ。それハッキリ言ってね、迷惑な話や。そんな夢物語言うの、やめろ！」と批判されるんですね。

しかし、成功者ではない大部分のユダヤ人大衆はそうじゃなかったんです。  
先ほど申しあげましたように、西ヨーロッパのあちこちで反ユダヤ主義。東ヨーロッパのあちこちでも反ユダヤ主義。そして、ロシアではポグロム/ユダヤ人に対する襲撃・虐殺事件が頻発している。  
安全に暮らしていきたい。自分たちが生き延びていくためには、自分たちの国を持つしかないじゃないかという、理想主義的かもしれないけど一番理にかなったヘルツルのメッセージは、ユダヤ人共同体・大衆の心の的をパーン！射たんですね。ユダヤ人大衆の心に火を点けた。色んなところで無名のユダヤ人たちが「なんと具体的で、いいアイデアじゃないか！」賛成の声がヘルツルの耳に届くようになりました。彼はそれに勇気を得たのです。

遂に、この本を出版した翌年1897年8月に、スイスのバーゼルで第1回シオニスト会議を開きました。

世界中のユダヤ人団体の代表 200 人を集めて、ヘルツルが先ほどの写真のようなタキシード姿で現れて、もう演出バッチリ！ 集まったユダヤ人たちの代表が彼の演説聞いたら、“今にもユダヤ人国家が出来上がるんじゃないか。もう手が届くところまで来てるんじゃないか” のような思いにさせるカリスマ的魅力があったのがテオドール・ヘルツルなんですね。

この第 1 回シオニスト会議でバーゼル綱領という宣言が採択されました。その内容を読んでみましょう。『シオニズムの目的は、ユダヤ民族のため、公的・法的に保障された領土をパレスチナに建設することである。』 ユダヤ人がパレスチナに国を持つということ、これがシオニスト宣言、シオニズムの目的なのだ！ 明確な目標を掲げたんですね。全員が起立して、涙にむせぶような興奮状態の中で、第 1 回シオニスト会議が終わりました。

この会議が終了して 3 日後の 9 月 3 日の日記に、ヘルツルはこのような文章を書き残しているのです。「『バーゼルで私はユダヤ人国家を設立した。』 こんにち公の席でこんなことを言えば冷笑されることであろう。だが、おそらく 5 年後、何があっても 50 年後には、皆この真実を見ることになるであろう。」

遅くとも 50 年後にはユダヤ人国家が出来上がっているだろう、と言ったのが 1897 年 9 月 3 日。それからちょうど 50 年後の 1947 年 9 月 3 日、何があったか。国連パレスチナ特別委員会が国連に対して勧告したんです。「パレスチナにユダヤ人国家とアラブ人国家の両方を造るために、パレスチナを分割しましょう。」 これをパレスチナ分割決議案と言います。その決議案を提出した日がちょうど 50 年後の 9 月 3 日です。

そして、その年の 11 月 29 日、国連総会で圧倒的多数でこのパレスチナ分割決議案が採択され通過し、案ではなくなった。すなわちこの瞬間に、ユダヤ人国家が国連で、国際社会で認知されたんです。それが 1947 年 11 月 29 日。ヘルツルが 50 年後には国が出来ているだろうと言った 1897 年から、ちょうど 50 年後だったんですね。それで、彼は現代の予言者とも言われています。

彼には本当にエピソードが多いんです。彼が色々やった中で特筆すべきことが 3 つあります。  
■ それまで漠然とした淡い期待でしかなかったユダヤ人国家再建について、ユダヤ人一般大衆の心の中に火を灯した。

残りの 2 つは続編でご紹介しますので、第 30 弾を楽しみにお待ちください。  
また『ごうちゃんねる』でお目にかかることを楽しみにしております。  
それまで皆さん、お元気でいらしてください。さよなら！